



# 首都大学東京 大学院 社会科学研究所



## 経営学演習 「企業倫理論」 #11

### § 企業倫理として資本主義を問う §

2014年7月4日

岡本 享二 (おかもと きょうじ)  
ブレーメン・コンサルティング(株)

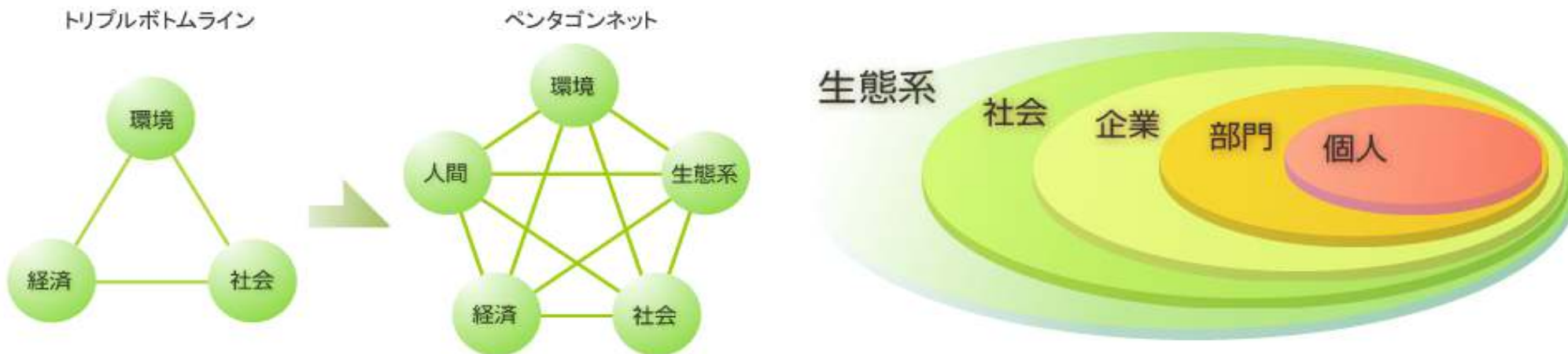
# 本日の講義ポイント

- 企業倫理を問うためにCSRにおける諸問題を学んできた。これらCSRで扱う環境問題・社会問題の背景には、行きすぎた金融資本主義の存在を見逃すわけにはいかない。授業でも度々資本主義によるグローバル化や南北問題(格差)を指摘してきた。
- 本日の講義では、現在の資本主義の問題点を鋭い視点で俯瞰した、代表的な著作を近年のものから順に発表して、さらに議論を進める。
- 担当する専門書を読破して、内容をまとめ、感想を添える。
  - 中谷巖著『資本主義以後の世界』徳間書店⇒平松秀郷
  - 中谷巖著『資本主義はなぜ自壊したのか』集英社⇒藤本邦男
  - R・B・ライシュ著『暴走する資本主義』東洋経済新報社⇒岩野貢
  - カール・ポランニー著『大転換』東洋経済新報社⇒三人で分担
    - 堀米淑江、松井亮太、田中良知

# 「企業倫理」と「資本主義以後の世界」

➤中谷氏の主張する「グローバルな資本主義の危機を克服するには、究極的には、『文明の転換』が不可欠」とは、「生態系→社会→企業→部門→個人の連鎖」と考える企業倫理観の再構築と同義と考える。

➤また、「行きすぎた資本主義」を見直し、「交換」重視の考え方から「贈与」の考え方にシフトさせることは、「ペンタゴンネットの有機的な繋がり」をイメージさせる。



出典:ブレイメンコンサルティング資料

# カール・ポランニー『大転換』(1)

- 約70年前、英国内での産業革命以降の貧富の格差拡大や社会問題の状況から、グローバル経済の欠点を的確に指摘した歴史的な大作。
- 現代のグローバル経済下でも、南北問題に代表される同種の問題が世界規模で起きており、21世紀に入って再評価されている。
  - 最近の「経済学の教科書」ではお目にかかれない「着眼点」が逆に新鮮。
  - 全編を読むにはボリュームがあって難解なところが多い。
  - しかし「序文」「紹介」「訳者あとがき」で全容が把握できる。
  - さらに各章の先頭ページに「訳者による梗概」があるので重宝する。
- 小さな政府、市場に任せれば世界は均衡するといった当時の古典派経済学者と、現在の新古典派、新自由主義者と主張が酷似している。
- 「大転換」の意味には、「経済の大転換」「経済学の大転換」「環境問題の大転換」と、さまざまな意味がある。
- この一冊を読み、ある程度理解できたなら、新聞やメディア、軽薄な学者が唱える「グローバル化で豊かになる」というレトリックが理解できる。

## カール・ポランニー『大転換』(2)

- 「自己調整的市場を打ちたてようとした経済自由主義の試みがユートピアである」ことを、経済の歴史を紐解いて明らかにしようとした。
  - 市場のなかった頃は、食糧不足のときに全員が飢餓に陥る場合以外は、死に至る厳しい貧困状態はなかった。しかし産業革命以降、貧富の差が常態化してきた。
  - 当時のイギリスでは救済のために、スピーナムランド法などの制度を作ったが、逆に生産性や賃金が下落し、失敗した。
- 「過去の教訓はそれとして、社会が経済を従属させるチャンスである。適切な規制を設けて、よりよい社会を築くべきである」と主張した。
  - 「自己調整市場」という考え方がまったくの「ユートピア」であった。
  - 自己調整市場の制度は、社会の人間的存在と自然的実在を壊滅させること無しには一瞬たりとも存在せず、「経済人」に依拠する人為的な社会は、19世紀のイギリスが生んだ突然変異である。
  - 近代の経済学は、擬制商品(労働、土地＝自然環境、貨幣)が本来商品と全く同じように機能すると言う間違った前提に立っている。

- 「行きすぎた資本主義」の事例を、各位の体験談（業務を通して感じた矛盾など）があれば挙げよ。
- 資本主義の矛盾や問題点が十分理解できたとしても、経済システムは大型船舶のようなもので、急には方向転換ができない。どのような心構え（企業なら理念や哲学）を持つべきだろうか。

## ☆次回の課題：

資本主義の問題点を三人の経済学者の著書からくみ取った。

これまでの資本主義に対する考え（特に持ち合わせていなかったかもしれないが）と、読後の違いがあれば記述せよ。

また、現代の企業倫理論では「資本主義のあり方も問う必要がある」と感じているが、皆さんの考えはいかがだろうか？

*cf:参考図書として『腐る経済』渡邊格著@講談社を挙げておくが  
必読ではない。*